

第58回
企画展

入場無料

異国船が おんぎた



令和元年

期間

8月6日火~10月27日日

場所

徳島県立文書館 2階 展示室

休館日

毎週月曜日・毎月第3木曜日(祝日の場合は翌日)

関連歴史講演会

「阿波人が見た日豪交流の原点
—文政12年牟岐浦異国船漂着事件—」

講師 歴史研究者 ニコラス・ラッセル

○日程/9月7日[土] 13:30~15:30
○会場/県立21世紀館 多目的活動室

担当職員によるやさしい解説

展示
解説

○日程/8月28日[水]・9月13日[金]・
10月5日[土] 13:30~
○会場/文書館 2階 講座室・展示室



文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島県徳島市八万町向寺山
TEL.088-668-3700/FAX.088-668-7199
<https://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/>

ごあいさつ

異国船の漂着。江戸時代においてそれは想像を絶する大事件でした。江戸時代も後期になると世界地図や地誌書の刊行が進み、一部の知識人は外国に関するかなり正確な知識を有していました。しかし、外国が文字通りの「異世界」であったほとんどの民衆にとって、異国船の漂着とそれを通して垣間見た異国の存在は、はかり知れないほどのインパクトを持った異文化体験だったのではないのでしょうか。

江戸時代の阿波国には何人も異国人が足跡を残しています。後にヨーロッパで二大ブームを巻き起こすことになるベニヨフスキーの来航、徳島藩全体を揺り動かした牟岐浦異国船漂着事件、土佐藩の水軍によって長崎に回航される途上の中国の漂着船、幕末の政局に影響を与えていた英国公使パークスの徳島訪問……。また、異国船に救助されたことによつて、期せずして異文化の中に放り込まれることになった漂流者たちの存在も忘れることは出来ません。

当時の阿波の民衆はどのように異国と触れ合い、何を感じ、いかにしてそれを伝えようとしたのでしょうか。今回の企画展「阿波へ異国船がやってきた」では、残された資料を通してこのようなことをお伝えしたいと考えています。ご覧になったみなさんが興味を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、牟岐浦異国船漂着事件に関して貴重な示唆をいただいたニコラス・ラッセル氏、展示資料をお貸しいただいた徳島県立博物館と徳島大学附属図書館、当館に資料をお預けいただいている所蔵者の皆様に、心からお礼を申し上げます。

令和元年八月六日

徳島県立文書館長 徳野 隆



徳島藩の 異国船対応

当館が所蔵する資料の中に、異国船が漂着した際の領民の対処について記された「制札」がある。「制札」とは、木札に禁令などを記し、寺社の門前や村落の入口などに掲示したものである。当館所蔵の制札は、板野郡栗田村（現・鳴門市北灘町）の庄屋であった藤倉家に残されていたもので、寛政五（一七九三）年と記されている。この時期は列強の日本接近が顕著になり始める頃である。制札は簡条書きで書かれており、「異国船が現れた際には御陣屋など関係各所に報告すること」などの記載がある。報告先の一つとして板野郡北泊（現・鳴門市瀬戸町）の「御陣屋」が挙げられている。「御陣屋」とは行政や警備等の拠点として藩内各地に置かれた機関である。北泊だけでなく、日和佐（現・美波町）や池田の宗安（現・三好市池田町ウエ）など数カ所にあったことから、それぞれの地域に掲示された制札には、報告先として最寄りの御陣屋が指定されていたと思われる。また、「藩から渡された装備を手入れし、破損などが見られた場合にはすぐに報告すること」も記されている。『徳川禁令考』によれば、この制札が作成される少し前に、幕府から異国船漂着時の対処に関する命令がいくつが出されている。「異国船を発見した場合はまず船具を取り上げ、臨検する。相手がこれを拒んだ場合は、刀や大砲などを使用して構わない。」そのために「人員や船を揃えておくこと、狩猟の機会を使って訓練しておくこと、武器の手

入れを怠らないこと」などが定められている。当館所蔵の制札は、これら幕府の方針に従って速やかに対処するため、領民を動員することを目的に作られたと考えられる。

また、制札には「抜荷売買の禁止」についても記されている。「抜荷売買」とはいわゆる密貿易のことである。江戸時代、海外諸国との貿易の場は長崎や対馬などに限られており、それら以外の地で貿易をおこなえば厳罰に処せられた。『御触書天保集成』には、制札が作成される五年前の天明八（一七八八）年に幕府から出された、抜荷売買を禁止する御触が掲載されている。「抜荷売買については前々から厳しく禁じている」それなのに「抜荷売買をおこなう者が今でも止まず、不屈きである」と断じている。阿波国内で実際に抜荷売買が頻発したかは明らかではないが、制札に明記することで、領民の意識を高め、不法行為を抑



定（異国船漂流対応の件、制札）



「異国船警衛御人数之図」



「大森御陣屋之図」

止する効果は少なくともあったのではないだろうか。異国船への対応は藩内に留まらない。嘉永六（一八五三）年にペリーが浦賀へ来航した際、幕府は諸藩に対し、関東とその周辺の沿岸防備を命じている。徳島藩も召集され、江城にほど近く、隅田川に沿った佃島・鉄炮州（ともに現・東京都中央区）の防備についた。また、安政元（一八五四）年にペリーが再び来航した際には、先の持ち場よりも南下した羽田・大森（ともに現・東京都大田区）の防備を任されている。本展示ではこの防備に関する二点の絵図を展示している。「異国船警衛御人数之図」は、沿岸防備に向かう徳島藩の行列の図である。約九メートルもの長い巻物に六百人近い人物が描かれており、大砲を牽く者、鉄砲や火薬を持つ者が確認できる。また、「大森御陣屋之図」には、大砲を据える位置や人員配置が細かく記録されている。大砲には「公儀（幕府）」、「御家（蜂須賀家）」と朱書きがされ、所有の違いが示されている。結果的に交戦には至らなかったが、現場は大きな緊張感に包まれていたことであろう。

文政十二年 英国船牟岐浦漂着事件

文政十二（一八一九）年十二月二十日、数日前まで土佐沖を漂流していた一艘の異国船が海部郡日和佐浦（現美波町）の沖合に姿を現した。早速、海部郡代は徳島城下や関係の各方面に急使を派遣。報が徳島城下にもたらされたのは同日の夜で、当時城下に滞在していたもう一人の海部郡代や藩の目付役、鉄砲組などが次々と現地へ急行した。この間に異国船は南下して牟岐浦沖に碇を下ろしている。

この異国船漂着事件に郡代手代として遭遇し、上司の命令で漁民に化けて偵察に赴いた浜口卷太は、翌年「異国船舶来話并図」という絵入りの記録を書き残している。これらの資料によれば、海部郡在住の藩士や海部御鉄砲之者（海部郡駐在の銃卒）・郷鉄砲（民籍の予備銃卒）・獵師等を郡内の各浦に張り付けるなど、瞬時にして防衛体制を整えられた。また、牟岐浦ではかねてからの手はずに従って祭祀や淨瑠璃興業に使う村中の幟や幔幕を茂みに集めて、さも軍勢が駐屯しているかのような偽装をほどこしている。当時は幕府の異国船打払令（無二念打払令）のもとにあつたが、近い将来に起こるであろう異国船来航に備えて徳島藩が入念な準備をすすめていたことがうかがわれる。

郡代は村役人などを使者として異国船に派遣し、水などを提供するかわりに即時の出帆を要求。従わない場合は砲撃すると大砲の弾などを見せて強要した。身振り手振りでの交渉の合間に、異国船側と日本側の間ではこの交換などの交流も行われている。日和佐の郡代陣屋備え付けの「万（蚕）国船印図」によつて、この船が「諸厄利亜（アンゲリア）治所三国「治」」＝イングランド・スコットランド・アイルラ

ンド連合王国＝英国の船であることも判明している。二十二日になつて、徳島藩はついに異国船に対する陸上と海上からの威嚇砲撃を開始。異国船は帆を上げて逃走を開始するが、風向きの関係などもあつてか最初は南方の浅川（現海陽町）方面へと向かう気配を示した後に、陸から吹き始めた風に乗つて出羽島の横を通つて沖合に姿を消した。この間、海上で指揮を執つていた郡代は途中から船腹を狙うことを指示し、何発かは命中している。その後の異国船の消息は杳としてわからない。現地に派遣されていた手勢も二十五日には撤収を開始し、二十七八日には「二軒屋より勢揃三而各本式相札行列厳重見事之見物」（「かどや日記」という形で城下に帰還している。また、日和佐の大浜海岸では郡代臨席の下で大砲のデモンストラーション発射が行われ、そのうちの二門の砲身が破裂するという後日談も残されている。

この異国船については英国船であること以外は全く不明であつたが、最近になつて、英国の流刑植民地であつたオーストラリアのタスマニア島で囚人たちが強奪し、太平洋各地で海賊行為を働いていたキプロス号ではないかという学説が登場している。この説が正しければ、この牟岐浦漂着事件は日本とオーストラリア（当然ながら徳島とタスマニア）のファーストコンタクトとなる。

この異国船漂着事件への対応では、動員された人夫等への手当や諸々の諸経費など藩にとつて莫大な出費となつた。藩はこれを「異国船御手当御用」として領内全域の制賦にしようとしたが、経費の回収は困難を極めている。

ベニヨフスキー

漂着事件

明和八（一七七七）年六月十日に一艘の異国船が日和佐浦の恵比須浜に漂着した。報を受けた徳島城下から鉄砲組などが現地に急行。海部郡内でも海部御鉄砲之者などが動員されている。同月十二日、徳島藩側の対応に何らかの疑念を抱いたらしい異国船は制止を振り切つて出帆。番船として動員されていた地元漁船群の阻止ラインを大砲で威嚇しながら突破し、沖合へと消えていった。以上が阿波国における最初の本格的異国船漂着事件の顛末である。

当時の日本人には知るよしもないが、この異国船を率いていたのは、自称「ハンガリー貴族のベニヨフスキー（一七四六～一八一六）。ポーランドの内戦に参加してロシア軍の捕虜となつた彼はカムチャツカの収容所を仲間と共に脱走し、船を奪つて逃走の途中であつた。この時、彼は長崎のオランダ商館長宛に極東におけるロシアの脅威を誇張した書簡を出しているが、その情報が民間に流出して工藤平助や林子平などの海防論に影響を与えることになる。無事ヨーロッパに帰還した彼は、マダガスカル島征服を目論んで同地で不慮の死を遂げるが、生前に著していた誇張と虚構に満ちあふれた『モリス・オーギュスト・ド・ベニヨフスキー伯爵の回想と旅行記』はヨーロッパでベストセラーとなっている。

ベニヨフスキーという文字通り世界を股に掛



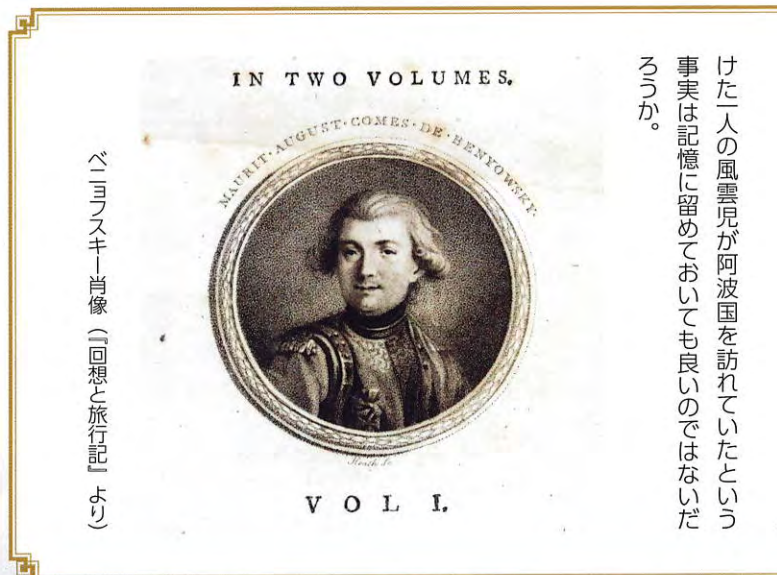
徳島藩側の配備図
 (『異国船舶来話并図』より)



乗組員と船内で飼われていた犬 (『異国船舶来話并図』より)



異国船の図 (『異国船舶来話并図』より)



けた一人の風雲児が阿波国を訪れていたという
 事実は記憶に留めておいても良いのではないだ
 るうか。

ベヨンスキー肖像 (『回想と旅行記』より)

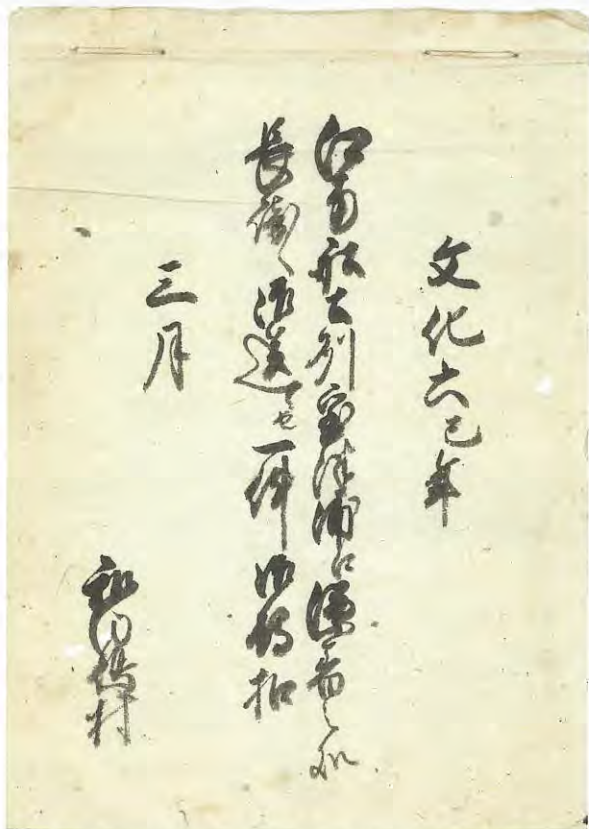
徳島へ来た

「江南船」と

「黒船」

江南船の回航

江戸時代における「異国船」と聞いて、どのような国を思い浮かべるだろうか。幕末のペリー来航のような黒船、欧米の船を思う人が多いのではないだろうか。しかし、日本へ来航（漂着）していた「異国船」は欧米だけではない。日本は中国の船に対しても「異国船」として接していたのである。今回紹介する資料は、漂着した江南船（中国の船のひとつ）に関するものである。



「江南船土州室津浦江漂着之處長崎へ御送セ一件御触控」

文化五（一八〇八）年十一月末、土佐藩へ江南船が漂着した。当時の幕府の方針に基づき、土佐藩はこの船を瀬戸内海を通って長崎へ回航するのだが、その途中、阿波を経由している。また、徳島藩は回航の補助も行っている。和田島村（現・小松島市）庄屋の森瀬左衛門によつて、この一件に関する触書き留めが残されている。以下、その記録を見てみよう。

文化六（一八〇九）年二月九日には、土佐藩から徳島藩へ連絡が来ており、三月初頭に、和田島村や中島浦・黒津地浦（現・阿南市）など海辺の村浦は、江南船を曳航する漕船、夜間の灯りとして篝火や雪洞、補給用の水や薪、遠見（見張り）などの手配を命じられている。

このように準備している中、江南船が徳島藩領に入ったのは三月二十八日、大島湊（現牟岐町）へ停泊、翌二十九日に橋浦（現・阿南市）へ入船している。江南船が来るまでの間、回航時の心得についての触は救回通達され、藩の役人や村浦の間では頻繁に書状のやり取りがあり、入念に準備している様子がうかがえる。

「古今味噌（未曾有）」の

パークス徳島訪問

蜂須賀家の重臣である武藤家の文書の中に、「古今味噌（未曾有）」の事なので記して置く」と書かれた資料がある。これは、英国公使ハリー・パークスが徳島を訪問した際の記録である。

慶応三（一八六七）年八月六日五ツ時過ぎ（午後八時頃）パークスたちは登城し、資料にはその際の行列の図が描かれている。行列のほとんどに描かれた藩の騎馬隊や士組によって厳重に警固されている「異人」がパークスたちのことだろう。退城したのは八ツ時（午前二時頃）である。資料には時刻しか記述されていないが、約六時間滞在しており、城内で歓待を受けていたのだろう。翌日は、午後から藩主斉裕・世子茂韶とともに徳島藩兵の訓練を見学し、その後は大滝山（現・眉山町）で滝を見、茶店「しら糸」で休憩している。休憩後、宿泊先の寺へ戻ってから小松島へ向かい、翌日阿波を離れた。

二日間という短い時間であったが、英国公使団が藩内を見て回ったということは、先の記述の通り、以前では考えられなかった「古今味噌（未曾有）」のことであつたらう。



「英国人着其日直二登城行列左之通（日記）」

異国船に 救助され 帰国した漂流民

板野郡岡崎村初太郎漂流事件

天保十五(一八四四)年 『亜墨新話』より

「船漸々と近寄り来たり、暫くは其あたりに戻り居たりしが、遂に端船を式艘おろし一艘ごとく阿蘭陀の様なる人五、六人乗り、三十目計の鉄砲六挺宛積て、再三我舟のあたりをめぐり試み、やがてごなたに乗移りたり、いかなる乱暴に逢ならんと恐ろしけれど、何をいはんも言語通ぜざれば、只一同に掌を合せ拝み居たり」



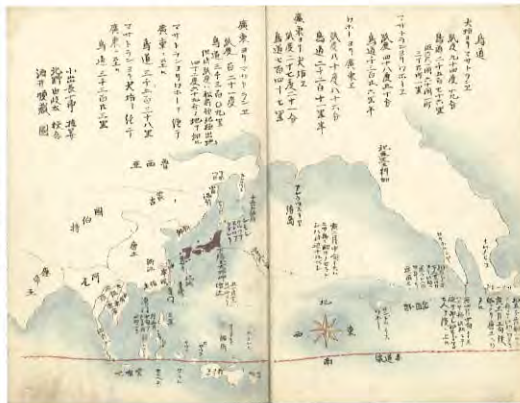
スペイン船に救助される様子 (『亜墨新話』より)

天保十二(一八四一)年八月二十三日、阿波撫養出身の初太郎始め十三名が兵庫商船「永住丸」(千二百石積・二十八端帆)に乘込み奥州南部に向け出帆するも、十月十二日下総国犬吠崎沖で遭難。海上に漂い流れることおよそ百二十日後の天保十三年二月、スペイン船「長さ十二間(約二十一・六メートル・帆柱二本・帆數十・端舟三

艘・乗組員二十八名)に救助される様子について書かれた一場面である。初めのうちは厩に三度の食事を与えられたが、後に一食になり、水も与えられなくなった。その上、昼夜となく酷使されるため、船底などに隠れて休息しかけると、太い棒でつき出され、打ち叩かれた。救助されてから一ヶ月後の真夜中に強制的にカリフォルニア半島(メキシコのサンルカス)へ上陸させられる。しかし、サンホセの寄宿先では家主に恵まれ、家事諸用などに使われることもなく、安楽に暮らすことができた。ただ、やはり懐郷の念強く、ハワイ・イ・マカオ・ニンプー・乍甫を経由し、天保十四(一八四三)年十二月三日長崎に帰国。翌天保十五年八月に徳島藩に引き取られていた。約三年間にも及ぶ漂流から帰国までの顛末は、徳島藩十三代藩主蜂須賀斉裕の命により初太郎から詳細に聞き取り調査が行われ、儒臣前川文蔵、酒



広東漢口 イギリス船が見える (『亜墨新話』より)



漂流海路図并経緯度数 (『亜墨新話』より)

井順蔵(後に藩士に取り立てられる)らによって『亜墨新話』として編纂されている。漂流のいきさつその他、スペイン語や衣服結婚式など当時のアメリカの風俗や習慣について木版画彩色の挿絵入りで紹介している。初太郎の帰郷に先立つこと二年、天保十三(一八四二)年に清(中国)とイギリスとの交戦(アヘン戦争)に終止符が打たれている。舞台となった清の沿岸地域の様子や、港に滞船するイギリス船が描き込まれるなど興味深い資料となっている。

『阿州高島村弥兵衛漂流舟物語』

天保三(一八三二)年

「所せん魚のえじきに成るよりは何国の地へ成とも流れ付、土地へ上り死に申度と統一心を究流る内、島の様成るを見付申候」

文化六(一八〇九)年十月十六日、弥兵衛ら十四名は大坂富田屋吉左衛門の舟「天徳丸」(千五百石積乗組員十五名)に乘込み大坂を出帆するが、十月二十二日伊豆諸島にて遭難。その後台湾に流れ着き、現地の協力を得て幾度も舟を乗り継ぎ、文化七(一八〇)年十二月二十三日無事に長崎に着いている。



『阿州高島村弥兵衛漂流舟物語』表紙

展 示 資 料 一 覧

No.	表 題	年 代	資料番号
阿波の異国船対応			
1	定 (異国船漂流対応の件、制札)	寛政5(1793)年	フシク 01150
2	大森羽田御出陳 (陣) 中諸事聞書	(嘉永6(1853)年)	モリ 200031
3	大森御陣屋之図	(安政元(1854)年)	モリ 200033
4	嘉永六壬丑稔六月三日相州浦賀江異国船四艘渡来二付御国ヨリ御人数御指向并売船聞取書・那賀海部郡御郡代ヨリ日和佐表出張御郡代江文通写シ	(嘉永6(1853)年)	モリ 200039
5	異国船警衛御人数之図 (巻物)	(嘉永7(1854)年)	モリ 200051
文政十二年英国船牟岐浦漂着事件			
6	異国船舶来話并図	文政13(1830)年	シノハ 00003
7	書簡 (牟岐浦沖合へ異国船漂流の件に付き報告)	(文政13(1830)年)	ムトウ 03128
8	海部郡沖江異国船漂着二付被召仕候船加子諸人夫御國中融通一卷・板野郡控	文政13(1830)年	ヤマ 200665
9	阿淡年表秘録 八	嘉永4(1851)年	イワム 01695
10	モーリス・オーギュスト・ド・ベニョフスキー伯爵の回想と旅行記	1790年	岩村家文書
11	地球全図	天保4(1833)年	徳島大学附属図書館 蔵
12	異国船図記	文政12(1829)年	徳島県立博物館 蔵
徳島へ来た「江南船」と「黒船」			
13	江南船土州室津浦江漂着之處長崎へ御送セ一件御触控	文化6(1809)年	モリ 302511
14	(江南船関係諸役の件)	(文化6(1809)年)	モリ 302503
15	英国人着其日直二登城行列左之通 (日誌)	慶応3(1867)年	ムトウ 02440
異国船に救助され帰国した漂流民			
16	亜墨新話	天保15(1844)年	イワム 00266~00268
17	板野郡岡崎村初太郎漂流已来之雑話聞書	弘化元(1844)年	イワム 00261
18	海外異聞 (巻之一~五)	(近世)	金塚家文書
19	阿州高島村弥兵衛漂流舟物語	天保3(1832)年	イワム 00269
20	異国漂流断 (写)	明治2(1869)年	サカイ 00801
21	高田屋嘉兵衛ヲロシア船ニ被召捕翌四年ヲロシア船ニ而送来候二付始末書付写	文化9(1812)年	ニイ 200890

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

講演会

「阿波人が見た日豪交流の原点 —文政12年牟岐浦異国船漂着事件—」

講師／歴史研究者 ニコラス・ラッセル氏
日時／9月7日(土) 午後1時30分から
会場／県立二十一世紀館 1階 多目的活動室

担当職員によるやさしい展示解説

日時／8月28日(水)・9月13日(金)・10月5日(土) 午後1時30分から
会場／文書館 2階 講座室・展示室

第58回 企画展

「阿波へ異国船がやってきた」

令和元年8月6日発行

編集・発行

徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山
電話 088-668-3700

印刷

(協) 徳島印刷センター

〒770-8056 徳島市問屋町164番地
電話 088-625-0135